太棹

第百七號

東京　太棹社　發行

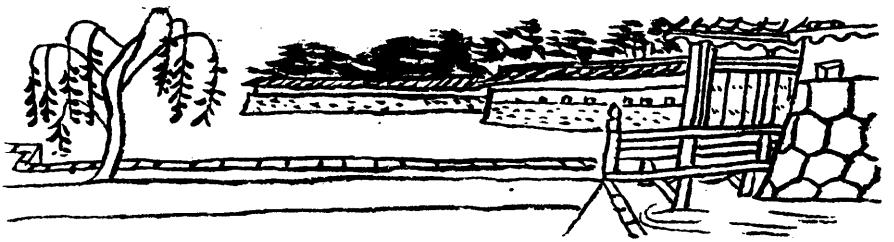
胃腸に　ミラカチ

東京市日本橋區濱町二ノ十
新潮製藥株式會社
電話茅場町三八一三番
振替東京七〇一〇八番

松幸

すき燒
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸(87)〔〇三八〇番 二〇〇〇番〕

風流・金ぷら・茶漬
【美地句】
赤ほ屋
新橋二ノ八
電銀二〇八



太　棹　第百七號目次

文樂座東京引越興行（一）……是澤九似廬…（二）
文樂樂屋圖譜……宮尾しげを…（九）
明治座の文樂（一）……齋藤拳三…（一〇）
ラヂオ淨曲漫評……金王丸…（一四）
淨曲三絃閑話（二）……是澤九似廬…（一六）
津太夫の『大文字屋』に就て……內田富太郎…（二一）
靈泉寺偶感（山田壽瓢）同次韻（石井規外）秋五句（三久女）
會報……（二二）
二三好會（森三好）一葉會（阿部一）靈泉寺より（山田壽瓢）
太棹社彙報……（二三）
當座帖……（三〇）
表紙・カット……宮尾しげを……

文樂座東京引越興行（一）

是澤九似廬

八月二日から二十日まで文樂の人形淨瑠璃が、紋下津太夫以下、駒太夫を除いた殆どの全員で、明治座へ進出興行、十九日間を通じて相當の人氣を博し、中途で風雨の御難に遭ひながら、段々尻跳ねの入場者で、この夏枯の時期をひかへて東都の豪華劇場で、かくも好成績を揚げ得たことは、當業者側の腕の冴えもさることながら、太夫、三絃、人形遣ひが心を揃えて、藝に眞摯な態度を持して、觀衆の心を魅了したことに起因するので、いつも、この古典に深き興味のつきせぬ思ひを浮べる我等は、烙暑を忘れて沒我の念に娛むことが出來た。

素人の一知半解の見聞を基礎とした我等の批評は、恰も盲目の垣覗きの誹りもあらふが、例によつて粗評を綴つて見ることにした。

語物の印象を書く前に、先づもつて營業者に相談して見たいと思ふことは、文樂座の引越興行だけは、東京の最小劇場築地の演舞場あたりで興行してほしいのである。營業上から觀て、これなら間違ひなしとの打算で、語物を毎回繰り返して、所謂、東京觀衆向きのものを羅列して、年來大劇場主義を固執して來た營業方針は、政策上からは當つて居ても、肝腎の太夫、三絃の巨匠連中が次第に陰が薄くなり、年々藝が尻細りすることを拒否む譯にはゆかぬ。淨瑠璃が日本音樂の中で、あれほどにも強い精神的の要素を持ちながら、貳千人以上も收容出來る大劇場では、到底、あの美妙で、纖細な三味線の情味と、太夫の精神から滲み出る苦心の語法とは、仔細に聽くことは出來得ぬのである。當事者の某氏曰く、現在東京での文樂看客は、決して淨瑠璃や三味線を聽きに來る人ではなく、人形を見物に來る人ばかりで、組見の前賣券にも誰にも、瞭きりと分るやうに、「觀覽券」と印してある筈です。之が何よりの證據なのですとの解說なれど、明治座の大舞臺の眞中に、文樂座の舞臺ほどの大きさだけを別に作つて人間の五分の一にも充たぬ小さな人形俳優を跳らして、その細かい働きの苦心を觀衆が眺めて、果して滿足して居るも

のであらうか、普通の人間の顏さへも朧ろげに見ゆる大劇場の半分から後方に居る觀衆には、人形芝居を見物に來ながら小さき人形の動作は勿論のこと、美妙な姿や、顏形、人形振りなどは、何が何やら皆目譯分らずに、五里霧中で、二階三階の客は明治座の舞臺と、天井を拜みに來るのではあるまいか。それに近年人形遣ひの主役が、はでな「裃」をつけて人形を操つる習慣が出來たゝめに、一層無臺面で、人形との調和が缺げて、やゝともすれば、人形と、出遣ひとが餘りにも、ごちや〳〵になり過ぎ、舞臺の落付を阻害することは一通りでなく、人形を見慣れぬ東京の看客から、かなりの批難も聞くやうだが、矢張、昔から仕來りの「黑んぼ」に限る譯で、全部を出遣ひにせずともよかりさうに思はれる。

今の劇場の舞臺裝置は、人形劇には、そぐはぬのみか、恰も沫茶席の盛花か、茶床に懸けられた新書畫の姿で、古典としての幽味と、雅情に缺け、調和と、落付が更らに整ふて居らぬ。古典の人形劇としての、そこに適合した舞臺裝置が必要なことは當然であるが、之も今の人形淨瑠璃には望めぬことで、せめては、可及的の古典趣味を取り入れて、昔懷しい氣持ちを一般觀衆に滿喫せしめるやう、仕組みすべきであるまいか。人形自體が、立體的の裝飾美術品であり、動作は單純化して幻想性を多分に含まれ、之を操つる人形遣ひは、一個の小さき無生物の木偶を、普通の男が三人がゝりで、最も大きな不便を感じながらも、その技巧で恰も精神のあるもののやうに舞臺上で人形俳優を活躍させて、その特有性を發揮さすことにより、太夫と三絃と三部一體の綜合的の調和を保つためには、特種の設備が要求される譯で、その小さき人形俳優に比例して、丁度當て嵌まる舞臺裝置が、最も大切な條件であるべき筈なのである。

明治座のやうな大劇場では、まるで小供が大人の借衣でもした樣な姿で、廣過ぎるために、手欄（てすり）と、出語床（でがたりゆか）との綜合的氣魄が、ぴつたりと來ぬために、太夫、三絃、人形遣ひの氣組が兎角に碎け勝ちで、眞の藝の妙境に觸れながら、觀衆の心が上滑りになり勝ちで、藝に解けこむことが出來ぬのは、何よりも遺憾なことであり、太夫にしても他年熟練したとは云へ、機械でない人間の聲が長時間に涉つて、每日同じやうに必死の努力も、日を經るごとに垂れこむで、其苦心の半分も觀衆には聽きとれぬ憾みがある。その他道具の配置、床と手欄の位置の無理、人形出遣り緩急の不定、見物席から視たまゝを齒に衣着せずに露骨に云へば、人形淨瑠璃の大劇場での興行は、無殘や、無理と矛盾だらけである。現在東京の人形芝居觀衆が之で滿足して居るものと思ふたら、それは丁度、首吊りの足を引張るのも同然のことで、斯くすることが、國粹の保存であり、唯一の古典藝術の華として外國人までにも自慢し、我邦傳統の名物を光らせることであると思ふて居たら、とんだ考へ違ひであり、終局は大閣樣以來の大阪名物を、一日〳〵に奈落の底へ引きづり込み、最眉の引き倒し

になりはせまいかと、他人の疝氣を頭痛に腦む譯だ。太夫の藝風に從つて建てられた、狂言割などの言ひ分は拔にして、先づもつて、日本名物の文樂だけなりと、太夫、三絃、人形遣ひの持つ力量に必適し、觀衆の七八分通りは滿足せしめる程度に聽かれ得る、千人以内を收容出來る小劇場で經營する雅量を示し、併て昔風の人形芝居に逆戻りした、のんびりした或る意味での、時代遲れのした設備に、改革してほしいものと思ふのである。年から年中、騷がしい雜音に住み慣れて、些いの事にも神經質になりたがる都會人は、人一倍の生活の希望に燃える反面には、慰安も要求され、娛樂も必要で倦み疲れた精神と肉體を、最も刺戟の鋭い映畫や、洋樂に娛むことに比較して現代離れのした昔風の文樂で、呑氣な芝居の見物が出來るものとしたい、興行價値としては衰退を辿りつゝある文樂の、古典の復活に新芽を吹き出す注射劑にはなるまいか。所詮、將來性のないものとすれば、人形劇初まつて以來三百餘年傳統の古典藝術の最後を飾る氣持ちからしても、一日でも餘命をつながしむるための劃策は、當業者としても手段を盡すべきではあるまいか。

第一回興行、菅原傳授手習鑑、三段目切、大隅太夫と廣助

この菅原三段目切は、昔から風格を尊ぶ澁い難場とされて居り、いろ〳〵の議論も殘されて居る、西の芝居に書卸された語物を、どうした關係か、東風に語る人もあり、又、西風に語る人もある。これを東風に語るものとすれば、中途で語つた豐竹派の太夫役場の風格が遺されて居るべき筈なので、このことに就て研究せられて居る識者の高敎を聽かしてほしいものと思ふて居る。この櫻丸切腹は、先代大隅太夫の專賣物であり、垢ぬけした語り方であつた。白太夫の輕さは、誰よりも格段の滋味が溢れて面白い寫實風の語り方が、未だにまざ〳〵と記憶に殘されて居る。隱退した土佐太夫も師匠讓りの折紙付の出物の一つであつた。今の大隅太夫にはこの菅三の切は聲柄に嵌まつた適役場なので、先年道八の糸で聽いたときに比較して、落付も出來、餘裕もついて、大隅が難澁した「有難や、冥加なや」も脫線せずと工夫がつき、あのむづかしい念佛の「南無阿彌陀」の間も無難の出來であつた。拜領の松、梅、櫻を植えならべて、春の匂ひ初める京都の片田舍、牛飼舍人の住む藁屋根の住家、白太夫は七十の賀の祝のすむまでは、悲しみを腹に包むで表面だけの朗かさ、早朝に來た櫻丸から聞く切腹の覺悟を、最後まで口を割らぬ老父の胸中の苦悶、大隅には先代のやうな聽くほど頭の下る藝の迫力は求められず、又、土佐太夫のやうな寫實から來る詞で感興の沸き立つ動きは乏しいが、さりとて不出來なものではない。古典趣味の如實に出て來る、三段目切場らしい櫻丸切腹は、大隅ならでは語れぬ藝だ。菅三の切は、素朴であり、簡素であり、少しも技巧で作らぬ、自然の風韻が尊ばれる。

語る役には品がなくとも、藝そのものに氣品が無くてはものにはならぬ。大隅の無器用の性質は、却て難場の風格に適して、自然の藝に首肯せしめる處がある。「撞木とかはる杖と笠」廣助の澁い彈き味、「あつたら若者殺せし」から段切まで人生の無常を寫し得た幕切、藝に冴えきる處はないが、洋茫とした古典味があり、語口に些かの陰翳もないのが、大隅の身上である。無器用さに湧く淨瑠璃の自然さに、聽衆の氣持ちを輕くする。

太夫の方は其人の持ちまへの聲柄に應じて、適當した語物を自由に選擇が出來るが、三味線彈の方は、どんな場合でも音色の良いものとせられて居る關係柄、調子の低い太夫を旨く語らす三絃の氣苦勞は、なみ一通りのことではない。廣助が舞臺で大隅を彈くのを聽くと、四本ソコ〳〵の調子で、今時の太夫としては、極めて低調の人である。大隅が聲の難所になると、廣助は聽衆に知らさぬやう、太夫にも氣付かれぬやう、ソツと調子を下げて、段切まへに素の調子に戻して居る。そしてドツシリした音で貫祿を味はして居る。彈きたい鳴らしたい三絃彈きばかりで、瞰のむづ痒ゆさを覺える今時に、自身の藝を空しうして太夫を語らす廣助の氣組を喜しく感ずるのである。

菅原四段目切、津太夫と重造

手習兒屋は昔から名人巨匠の誰もが、自身の個性に當て嵌めて、いろ〳〵の型が語り遺されてある。津太夫は新工夫によらず殆ど昔に近い風を固守して居る。元來津太夫は持力のある上に、かゝる語物になると、確き信念の境地があつて、三絃彈も、人形遣ひも提げて往く思ひがする。そして語る人物の轉換がサラ〳〵と自然にゆき、些かの屈托もない。今の斯界では典型的の存在なのである。津太夫の聲から生れて來た原作を通しての味と、その調和が、巧まずして保たれた處に、この人の自然の淨瑠璃が親はれる。松王でも、源藏でも凡て瞭はれる人物が、耳ざはりが荒く、ブツキラ棒のやうに語つて居ても、聽いてゆく内に、爲も云はれぬ醍醐味に醉はされてゆく實力は、寔に、藝と格とを完備した、菅四であつたと推賞を惜まぬ。「梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、なにとて松は」と聽えたが「なにとて松の」ではあるまいか。

津太夫の白地の床着に、薄鼠色の肩衣、强き電燈に反射して、段々と語りこむで上氣した顏が聊か紅潮を帶びて「松王」申つけてはをこしたれど、定めし最後の節未練な死をいたしたでござらふのー「源藏」アヽイヤ若君菅秀才の御身がはりと云ひきかしたれば、潔ぎやう首さしのべ、と愁然となる。「松王」逃げ隱れもいたさずになア、「源藏」アノにつこりと笑ふて「松王」アノにつこりと、あとは口中で……津太夫は膝に手を置いて、少しく前えかゞみになり、穴のあく程見臺を見詰めて愁ひのこもつた、ハヽヽヽの泣き笑ひ、今度は首を稍や右上向にして、愁ひを腹に喰ひ占めて、表情は

つとめて平氣を裝ふたハ、、、、の笑ひがあり、段々自身も愁ひが腹から込みあげて來て、聽衆も津太夫の藝力に締め付けられ、津太夫の顏と、全觀衆の顏が、無言の中で睨み合ひ津太夫の凄壯の氣魄が高調しきつて、憂雲が萬場に立ち暈めた一刹那に、二階の隅から、パチ〳〵〳〵と拍手の起つたゝめに、津太夫が必死の努力で、こゝまで來た緊張味が、一瞬で徒勞に期し、精神的の氣魄がゆるんだために、ヂツと喰ひしばつた腹力が碎けて、あとは技巧の泣き笑ひになつて、精神的に徹底出來なかつたことは、返す返すも遺憾であつた。菅四一段を通じて、津太夫としての貫祿の語りどころ、松王と、源藏との、詞のアヤと、間詰のせり合ひで、段々と自身の腹に餘裕を整へて、こゝ一番と云ふ際どい處、渾身の氣魄を張り切つた刹那の拍手は、思はぬ伏兵の一聲射擊で丁度、三味線彈が「ハリキリ」に滿身の努力を懸け、自分の呼吸をつめて、こゝぞと思ふ肝腎な一瞬に、太夫の呼吸が亂れ、大切な一撥を打はづした時の氣持ちの惡さと同然だ。

淨瑠璃は、聽く人も研究すべきで、太夫がこゝぞと思ふ苦心は聽手には分らず、自分の心で、まづかつたと恥ぢ入る處を逆にヤンヤと擾がれたり、之と反對に肝腎な聽き處で、とんだ拍手が來たりすることは、太夫にとつて迷惑至極で、うら淋しい一種の悲哀を感ぜしめた。東京の看客は、通がらずと、淨瑠璃を靜肅に聽く心懸けが必要だ。昔の女義時代からの傳統で、洵に愧かしいことである。

越路太夫の菅四は、前半よりも、後半になる程藝が冴えて來て、泣き笑ひが終つて、「思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、嘸や草場の蔭よりも、うらやましからう、けなりからう」から「忘れかねたる悲嘆の涙」の大ずえまでが、取り分けて結構であり、無類な趣きが漲ぎつて居つた。松王の泣き笑ひが終ると、大概の太夫は之で役目が畢つた樣に考へて淨瑠璃を捨てゝ語る習慣があるが、實に困つたものだ。

三絃の重造は、腹も强ゐし、音も良く、柔か味もあり、達者な人だ。今度の菅四は、打合せが不足して居たのか、津太夫との呼吸がぴつたりと來ぬところがあつた。そして菅四として澁味が足らぬのは珠に瑕、津太夫の淨瑠璃に、まだ藝慣れぬのと、彈き慣れぬためでもあらうが、年齡柄とも察せられた。紋下の女房役としてどこにか餘裕がなく、貫祿まけがして床での調和が整はぬのは致し方がない。比較的に藝が萎縮せず、屈托せずに、達者に任せて、彈き切つたことは、流石に若手の天才肌の人と敬服させられた。要するに三絃彈の境地は、「鳴らせ、鳴らすな、彈け、彈くな」で、いつまでも其味が耳に遺つて離れず、忘られぬ娛しさと、尊さがありたいものと思ふのである。

新口村、古靱太夫と清六

美しい電燈に飾られた明治座の廊下に、開幕の鈴の音が流れて來るを合圖に、待ちにまつた古靱太夫の新口村を聽くべ

く椅子席についた。

眞世話物の内でも大和地と云はれて風格のむづかしい語物美音の太夫でさへも逡巡する新口村を、古靱がいかに工夫して語つてゆくかは寧ろ不思議とした程で、我等は餘り昔のことは知らず、明治になつてからは、攝津翁が新口村の模範を遺されて居り、一般にこの風が耳に殘つて離れぬ間は、誰れが語つても實演としては餘程の研究を要し、あらゆる努力を拂ふて、苦心せぬ限りは容易のことでは自身に得心がゆかず聽く方でも納得せぬ至難な語物、早い話しが攝津翁の門人先代南部太夫が、師匠隱退後この新口村を得意で語つて居たがあの美聲家の南部でさへ、攝津翁とは、格段の優劣があり過ぎて、比較にならず、第一あの風格と、上品さが缺けて居て非常に倦怠さを覺えたものだ。攝津翁は語り出しの「落人のためかや今は冬枯れて、芒き尾花はなけれども、世を忍ぶ身のあとやさき」から「故郷の新口村につきにけり」この間の名文章で、聽くものがウツトリとさせられた。南部は恰も師匠の物眞似で、所詮は、聲や形では語れるものではない。

古靱は凝り性の太夫で、先年珍らしい「宮守酒」を友次郎の三味線で語つたのを聽いたときに、純東物の越前風としてむづかしい語物の上に、古靱としては持ち味に染まぬ語物に我等の興味を感じたこともあり、マア現今では音遺ひの上手な古靱に期待を懸けるより外なく、古靱がどの程度までに語り活かし得るものかとの思ひもあり、段々と腹の薄くなりゆく古靱としては、自身の持ち味にそぐはぬ語物でも、こゝらを睨ふべきであると考へられ、興味をそゝられた次第であつた。

節物として引延ばすことの出來得る新口村を、案外に間を縮められたことゝ、唯さへ重も過ぎて時代がゝる詞のアヤをつとめて、輕く〳〵運ばれてゆく技巧の用意に首肯した。梅川と、忠兵衞の詞が、どこやら、ぎこちなさを感じながらも周到の音遺ひと、精神の情味で、古靱の持前の瑕瑾が不思議と、かくされて居た工夫に感心させられた。自己の持前を孫右衞門にそゝいで、他は出來るだけの情味で一段を語り活かそうとする苦心も充分に認められ、「のべ紙ひきさく其手もと、不思議そうに打眺め、こゝらあたりで見慣れぬ女中」などの自然味「ねんごろにして下さります」寫眞と呼吸づかひ、榮三の孫右衞門の人形とぴつたり心脈の通ずるものがあつた。素朴純情な孫右衞門の描寫が、古靱の持つ藝の上品さにうつらふて些の無理もなく聽かれたことは、流石に古靱ならではと首肯せられた。

研究家の古靱は、自分の藝術良心に驅られて、作意と風格を、出來るだけ表現させようとする眞摯な努力には、いつも敬慕さるゝが、その凝り性から生れる堅實さが、却て演出を固くするのではあるまいかとの思ひが浮ばれて居つた。昔の新口村らしい、大まかな古典としての味は乏しい恨みはあつ

たが、一句一節もゆるがせにせぬ、隙きのない、眞の藝術家の純情さを特に推賞せずには居られぬ。古靱の今度の語物の中で、特に目立つたのは、忠臣講釋喜内住家であつた。昔の初代柳適、組太夫時代の淨瑠璃を、そゞろに偲ばす想ひがした。この印象は次號で綴つて見ることにした。

文樂座打揚後は、太夫のことは勿論、三絃側の藝評のことでも、あの三絃は達者ちやと喜び、あの人の藝は解らぬと沈默し、あの人の藝は鈍重過ぎると嗤笑し、とり〳〵の評判は、まるで雲を呼ぶ蛙のやうに、驟雨後の蟬聲のごとく、自分の好きと、嫌ひを標準とした藝談、自身の最負を因としての巧拙論、とりとめのない評さの種を蒔いて居るが、清六の三絃に對しては、素、玄ともに堅實な藝であるとの好評、衆目の指すところ確かに、清六は高座の態度といひ、藝格といひ、若手の第一人者であることに異論はない。今度は興行五回を通じて、その藝を味ふて見た我等の耳では、清六はその語物によつて、比較的に優劣のある三絃彈きであるやうにも考へられて來たことである。初手の新口村は、清六としては不出來であり、あの人の持ち味にはそぐはぬものかと、聊か期待はずれの思ひがした。古靱の聲柄は、更らに新口村には適しては居ぬけれど、研究と、理詰で、一句一節に、凝つた技巧を聽かして居つた。古靱の相三味線としての清六に望むらくは、新口村は古靱の藝に契合せずに、その反對であるべく三味線は、つとめて柔らかく、ふくらみを持つのんびりした氣持で、音色を味はした模樣を彈ひてほしいのである。眞世話物の中でも、柔かな模樣と風格の彈けぬ難物としての新口村としては、どことはなしに固過ぎて、色氣に乏しい思ひがしたのは遺憾であつた。素人の我等は、大和地などゝ云ふ昔の風格などは知らぬが、「節に節あり節に節なし」といふた古典の妙諦から想像して見ても、音と音とのつなぎの間が切れて來ると音色が沈み勝ちで、兎角淨瑠璃が寂しくなる。なるべく連絡をとるやうに彈いてほしい氣持ちがした。古靱は上品で、陰氣な語口ゆへ、三味線は、反對に色氣が有れば調和がとれるのではあるまいか。古典に備はる自然の匂ひは、理知から脫離して娯しんで語り、愉しんで彈くべきものではあるまいか。お俊傳兵衞、堀川などゝは、まるで違つた新口村の模樣は、叡知の境を通り越して、大まかな漂渺とした氣持ちで、はじめて彈けるのではあるまいか。思ふまゝを、露はに書いて見た。妄評多罪。

昔は文樂座には櫓下（紋下）が三人あつて、攝津翁、廣助（五世）玉造（初代親玉）が並び稱されたものだ、今の師匠なしの榮三の人形振りは、恐らく今古の名人にも讓らぬ至藝で、今度の第一回興行の新口村孫右衞門の幕切には、思はず帳然たる思ひがした。この妙境に生きた、光輝燦然たる人形振りの批評は紙數の都合で次號に綴らしてもらふことにした。

文樂屋圖譜

——宮尾しげを——

人形の面

合邦で俊德丸が、血を呑むと、忽ち今迄の人形の面相が變つて、奇麗な顏になるので、見物衆はびつくりしてゐますが、カラクリがあつて、その人形の頭にはまる樣に、お面が出來てゐます。面の耳にあたる部分に薄く竹をそいたのをつけて人形の髮と面との間に差し込みますと、ちよいと見は判らなくなります。

圖のは、鏡山の岩藤と河原の横山勘左衞門の面です、岩藤のは奇麗な顏で、お初と戰つて斬られると、この面をとると、下て血どろみの顏になります。高さは四寸あります。勘左衞門の方は傳兵衞と河原で立廻りして、みけんに血がつくとき取りばづします。この方は四寸三分あります。この外に面は毒酒の正淸、合邦の俊德丸、天神記の菅相丞、太閤記中國水攻の淸水長左衞門があります。

明治座の文樂（一）

――人形を主に――

齋藤拳三

津、土佐、古靱、文樂の三頭目には、各自の演りたいものを出さして見たら面白からうと私は前から希望して居た。無論我々の云ふ事など眼中に無い興業師だが、遇然にも迷信的に明治座を厭がつて休みたがつた古靱太夫に、三つだけ當人の希望の出し物を演らせると云ふ約束が、我々最負にはもつけの事となつて、彦山の九ツ目、廿四孝三段目、忠臣講釋七ツ目と東京での封切りものが聞かれて嬉しかつた。

どうせ組見で、狩り出してくるお客だ、毎年同じ顔の人である。毎年々々同じものを繰り返してはお互に氣がさす、流石に古靱太夫は偉いと思つた。

津太夫が三味線綱造と別れたのは今度の文樂異變の一つだ聞く處によると藝術上の爭が原因だと云ふ、これも結構だ。お互に希望も註文もなく諦めた同志が、別々の心持で高座に並び、其の年月の永いのを賣物にしても仕方がない。お互の藝が毀れて行くばかりで有る。紋下に成つてからの津太夫の相三味線は道八、友次郎、綱造と變つてゐる。然も其期間の三分ノ一は代役であつた。

津太夫の左側に座つた三味線を我々東京人でさへも叶、廣助、新左衛門、重造と知つて居る。餘り迷はず藝質のよい新人を拔擢指導すべきであらう。

其の爲か、今年の津太夫は大文字屋を除くと前年より劣つて居た。何時も病弱の古靱太夫が此の度は好調で、以上三つの外新口村も美事な出來だつた。

私一人の迷信かも知れないが、古靱太夫は明治座よりも清六の休場の時がかへつて聲に崇る樣な氣がする。若手進々中第一に精彩を發つ彈き方もさる事ながら、一日中三味線を手

からはなさない熱心家は、古靱太夫の咽喉よりも私の耳に藥になるのかも知れない。

話は少し横道へ入るが松竹は表方、卽ち營業政策に藝人を參與させ過る樣に思ふ。

客と藝人との最負關係を利用して、組見のお札賣りは松竹の傳統的商策だが、餘りに度を過ぎると技藝の勉强が二の次になつて、益々品物が底下して行く事になる。我々素人側から見れば土佐太夫、吉兵衞、友次郎の如き巨頭の隱退は其れが原因を成してる樣にも思はれる。只さへ太夫無人の一座に駒太夫、文字太夫の除外されるのは、組見の弱腕が主因の樣に推測され、今月などは歌舞伎座以上の入場料を取つてる文樂として、餘りに無人の一座は何か物足りない感をいだかせはすまいか。

第一回　八月三日見物

車引は義太夫では時平の笑ひが眼目であらう。これは最近では先年の和泉太夫が古風に丁寧に演じた。私はもつと古風に「あらはれ出たる時平の大臣」で笑ふのを聽きたいと思つてる。人形は平凡で、歌舞伎の菊五郎、三津五郎の演技の方が面白い。

三段目は三人中、訴訟の件の呂太夫が群を拔いて居た。大隅太夫は前から「櫻丸腹切り」は不得手と見へる。糸も寛治郎が群を拔いて進境著しかつた。此の場の人形は茶筌酒が面白い。紋太郎の八重が水仕事が出來ないで文五郎の千代が教へるのも人形だけに可愛い。唯、春が左手でつみ草をするのは笑止だ、或は私の見物の日だけの誤りかも知れない。

切腹で八重は參寶を恨めしさうに打つて極る仕草が無かつたが、此れもした方がいゝ。此處は羽左衞門、宗十郎共に八重を膝に組み敷いて腹へ突きたてるが、人形はあつさりしていた。門造の白太夫は幕開きに草を一寸取つたが面白かつた。此れは歌舞伎に仁左衞門の死後好い白太夫のない爲かも知れない。

津太夫の寺小屋は粗朴雄大な此の人の長所が出ないで「性根どころか」と「地獄極樂の境」が同じ意氣となつた。缺點の方が目立つもので餘りにも度々の演出で規畫の失敗である榮三の松王は流石に結構で「けしとむ內」で上手下向きの形がいゝ。千代と動く段切れも旨い。文五郎の千代も結構で暖簾口へ入る件の暖簾へ手をかける後姿が維にもないしつとりした味で有る。人形は總じてギクシヤクしずに、床の文句でしつとり動く處が値打ちである。失敗は世話屋臺が下手過ぎて、玉藏の源藏が「打てば響け」で柱に寄つて何時もの形をすると、松王玄蕃の居所と向き合はなかつたのは不手ぎわである。

古靱太夫の新口村は松太郎仕込みの由、どうしてすばらしい孫右衞門だつた。榮三の人形と相待つて、久々に古靱の眞價を心ゆくばかり發揮した。此の二人は小さいながら上品に

完成した藝風が一脈相通じてゐる爲か「名乘つて出」の件など久々聽く清六の美事な糸と相待つて、羽織をかぶる獨創的な幕切れまで面白い一幕であつた。

綴太夫の宿やは餘りに駒澤と岩代を調子をきわだてゝ變へるので、桂文治の落語の樣な感じのするのが缺點である。

宿やは故人ではやはり先代大隅がよかつたさうだ。大隅は特に他人の捨てゝしまつてる人物を甘く語つた。志度寺の源太左衞門、野崎村の婆、天網島の善六太兵衞、宿屋でも岩代が特に旨かつた。岩代の「左樣々々」を下の聲で小さく冷淡に云ふのも、流石に綴太夫が大隅系の人だからであらう。又「知らなんだ」をうんと突込んで云ふのも、二段目の秋月弓之助屋敷の殘念さをかけての言葉であらう。

新左衞門の糸は馬鹿に力がなかつた。變だと思つてる內に中途で新太郎と變つてしまつた、腹痛の由。

人形は文五郎の顔顏の出た所が、すつかり盲人になつてゝ敬服である。文五郎は達者に動く箇所よりもこんな件が旨い。故越路太夫は文五郎の藝がきらいだつたと聽く、あの淨瑠璃を語る越路らしい。次に政龜の駒澤がしつとりと仕事をしないで旨い。淨瑠璃通の田中煙亭氏は政龜最負であつた。流石に煙亭氏は人形の理解者だと思ふ。

第二回　八月六日見物

先代萩御殿は前半は前日不振だつた新左衞門が、昔ながらの美事な撥さばきを聽かせた。

私の潛越なる獨斷を以て云へば、假りに友次郎、新左衞門吉兵衞を勉强努力派とし、道八、吉彌を天才派とすれば、前者はたとへ多少色あせても最後まで其の藝の風格のくずれずに現存する人、後者は晩年に至り藝格が崩壞と云つては語弊が有るが、變化を來してしまふ人ではあるまいか、然して團平末流に後者が多く、文樂系末流に前者が多いのではあるまいか。

無論これは難澁至極な太棹音學に對する素人の疑問懷疑で斷定でも結論でも無いが、三味線彈きの晩年は義太夫を語らせて樂む人で有りたい。三味線を彈いて樂しむ人で有りたくない。

大變脫線してしまつた。人形は文五郎の政岡が「屛風にひしと」の件で後向きに泣く所が流石だ。

東京ではめずらしい彦山が、八ツ目の杉坂墓所から出た。大隅太夫はサラリと旨く語つた。廣助の糸も少しひつかかる難はあるが、古風でいゝ。六助は榮三が使つて面白かつた。

一體松竹は人形使ひに連中をさせる關係上か、殆ど全部出使だが、世評に反して私は此れに贊成する者で有る。理由はこうだ。

昔の人形使ひは、黑衣でも自分の名譽を重じてなか〳〵代役をさせなかつた。若手は亦代役で眞價を認められ樣と代役をねらつてゐた。然し現在の文樂で、もし一日中全部黑衣でやつたら榮三や文五郎の役は、可成多く代役になつて仕まい

はすまいか。

古靱太夫の九ツ目は面白かつた。嫌いだつた此の一段が故人大隅を聽いて好きになつた由、土佐太夫も此の一段を得意にして居たが、とう〳〵東京で出さないで隱退してしまつた「思案吹きちる春風に」から「したふ涙の雨やさめ」のマクラがすばらしく特長を發揮した。榮三の六助も結構で「持てあましたるむつと顏」で柱に寄る件と「切るやら突くやら」が輕く床の文句と太皷とあたる件が特に面白い。

紋十郎のお園は天蓋を取ると、ハチ巻をして居るのが變つて居る。

津太夫のめづらしい大文字屋は、土佐太夫の名品が今でも耳にあるが、此れを彥六系とすれば、津太夫のを文樂系のものとして兩方を認めたいと思ふ。私は津太夫の五ツの出し物中これを取る。人形は榮三の輕妙な權八と、門造のシツトリとした助右衞門が上出來で、文五郎のお松は、餘り榮三郎の膝に手をかけるので、色氣のある文五郎の使ひ方では兄弟でなく、戀仲の樣に見へる。

一體に文樂は若い太夫、三味線に役を附ける爲か餘りにも景事が多過る。五日變りを全部見るとあき〳〵する。知らず〳〵其處が食事の時間になる。

第三回　八月十日見物

十數年前歌舞伎座で故源太夫以來、出た事のない源平布引瀧三段目が出たのはめずらしかつたが、一段を相生太夫、織太夫、大隅太夫と三人に語らせ、いろ〳〵口上を云ふので氣分が中斷されて困る。惡作の四段目を拔いても此の一段を津太夫に語らす可きであらう。殊に糸の道八も代役で興をそいだ。人形も甚だ平凡で、音羽屋型の名演出を知つてるものには興がない。僅かに玉藏の實盛が幕切れに仁惣太を「かぎ繩」で引寄せて「ハネ首」にするのと「あきれはてたる」の腕を見る處で、門造の瀨尾がギバに落ちて極る位が特種だ。佳作は政龜の九郎助で、ハチ巻をして動く綿繰馬の件など面白い演技だ。松並檢校琵琶は愚劣極まる作で、琵琶と三人上戸の節付によつて命脈をつないでるものであらうが、もし其れならば箱根靈驗覽仇討の瀧の段の方がぐつと面白い。仕丁が女官を詮議したり、檢校に琵琶を彈かせたりあまりにも無理な筋で、人形も行綱は不思議に昔から榮三は面白くない。若い內は荒物使ひで、今は女形使ひ專門の文五郎が、久々に藤作實は越中次郎を使ふので大いに期待したが、火にあたる間肩をたゝいたり、火がはねて熱い仕草をしたり、達者なだけで平凡だつた。

玉藏の平治は三人上戸中流石一番光つてるが、行綱の「湯玉たばしる如くなり」でもう刀を拔いてしまふのは亂棒である。此の人と玉幸は床の文句にかまわず仕草が早過る。

床の文句より人形は先へ行くべしと先代玉藏は敎へたと云ふが、大間違である。其れならば長門太夫の「すしや」で、團平の權太の引込みの敲きの手强い音に、親玉の玉藏の腹帶が切れたと云ふ逸話はなりたゝないではないか。

ラヂオ演劇評

文樂中堅

〔七月二十日〕

增補大江山（カケ合）＝戻橋の段

扇折若葉實は愛宕山の惡鬼　竹本鏡太夫
渡邊綱　竹本大隅太夫
絃　豐澤新左衞門
豐澤廣助
ツレ　豐澤新太郎
八雲　鶴澤友三郎
豐澤龍市
大護摩　今藤長太郎
杵屋勝勇治
鳴物連中

常磐津物で、歌舞伎でも五代目菊五郎以來、御馴染の「戻橋」義太夫になつたのは、明治三十三年、團平さんの節付で堀江に初演され大入を取つたといふ。今夜の鏡太夫は、當時も其座にあつた人なり又たこれを得意に語つてゐる人。扇折若葉（芝居では小百合）實は愛宕の惡鬼は、此の人に打つて付け、近頃の鏡さんとしては、驚くべく緊張もし、愼んでも居て、存外といつては失禮だが、上等の出來である。初めの出から、可愛いらしい中に、凄味もあり、綱に見現はされ、惡鬼の本性を現はしてからは、大荒れに荒れて完全にその眞價を發揮した。大隅太夫の綱も、適材適所で、近來、大器稍や晩成の實を示しだして來た此の人、堂々として、武邊一徹の面目を表はし、好調のコンビとうなづかせた。新左衞門、廣助の兩師、自在の絃は樂々と彈きまくり、其他ツレ、八雲、大護摩、鳴物はやし連中も申分なく、大がゝりの『戻橋』誠に四十分間のおたのしみであつた。だがしかし、最後に一言したいのは、文樂座が得意に演す『勸進帳』やこの『戻橋』などは、いかに團平師の節付なりとはいへ長唄のそれの方が、曲節其他に於て、勝つてゐるといふ事である。

大阪女義

〔七月二十五日〕

假名手本忠臣藏＝二ツ玉と身賣り（カケ合）

定九郎　竹本久國
與市兵衞　竹本春駒
絃　豐澤東重
母親　豐竹此助
おかる　竹本雛駒
一文字屋　竹本綾助
勘平　竹本綱龍
絃　豐澤小住

これなどもBK新案といへばいへやう。今風に藝題を附ければ、『與一兵衞の死』とでもするか、一幕二場で、よく判る。イヤそれは贅だ言！　二ツ玉で二孃とも相當なもの、テン〳〵〳〵で出て來る手負猪は、久國さんだつたか春駒さんか、女義の五段目は、とにかく珍らしい。六段目の身賣りは、しんみりと、雛駒さんのおかるが可かつた。此助さんの母親と綾助さんの一文字屋は達者の二字で盡きる、絃の小住さんは樂なもの。おはやし入りはお景物！

大阪混成　〔八月九日〕

道中膝栗毛

＝赤坂並木より古寺まで

（カケ合）

彌次郎兵衛　竹本角太夫
喜多八　竹本文字太夫
和尚　豊竹和泉太夫
親父仙松　竹本常子太夫
絃　豊澤仙造　豊澤八造

チャリだなんて馬鹿にして貰ひますまい。彌次喜多なんて古いとけなす解らずやは、奇聲とくすぐりを下手に騷々しくやる漫才の下駄穿き小屋へでも行つてくれ。奇聲は奇聲、くすぐりはくすぐりだが、洗練されてゐる、氣が利いてゐる。多數の百姓にやア解らねえ我等のユーモアである、とまア怪氣焔を上げておいてさて、全くの話しが今夜の彌次喜多のカケ合は、BKが又たヒットを放つたものといへる。膝栗毛の中でも赤坂並木、古寺などは、有名なもので、東京のお素人でも時には高座へかけられる。杉山茂丸先生亡き後の、此の方面の大家、福島行信氏の此の上るりを、我等は一度傾聽した事がある。『次第に更くる夜嵐の、ぞッと身にしみ彌次郎兵衛……など、頗るをかしいものであつて、我が角太夫師の縱横自在のノドによつて、更に又た、文字太夫氏の喜多八も、懸命に滑稽味を放出して、盛んに我等をほゝゑませた。輕い氣持で樂しむべき、このチャリ上るりを何と眞劍に聽き入つた事か、それはやがて、如何に他の普通の上るりの、常におもしろからざるもの多きかを嘆ぜしめられた譯である。アヽ、角太夫師を、再び文樂座へ戻して、滅多に出ない古曲の復活や、チャリ上るりの上演が願へますまいか。人形には我が榮三氏健在なり、當事者諸君以て如何となす！　ぷッ……

文樂若手　〔八月十五日〕

生寫朝顔日記

＝大井川の段

竹本源太夫
絃　野澤吉彌
胡弓　野澤吉藏

アレ又た源太夫……といふ人があつたかも知れぬが、今度は『宿屋』を遁げて大井川だけを四十分に渉つて放送するといふ。何は然れ、とスキッチを入れると成るほど、宿屋の切れ目、駒澤岩代が出立した後、德右衛門の獨り言の處から、ゆる〳〵と時間引延ばしを策しつゝ始められた。續いて、大井川になる、ひれふる山も無事に、やがて關助とのめぐり合ひ、德右衛門の腹切りまであつて、それでも、尙ほ四五分の時間を殘して切れた德右衛門が少し若過ぎ、關助の詞は大に間延び（これは時間延ばしの爲め？）朝顔の深雪は、好い出來で、殊に關助と知つての、驚きやら、懷かしがりなど結構なものであつた。前にも書いたか知らぬが、義太夫は、太夫の位置身分に相應して、成るべく、役どこを語れば間違ひなく、修業中に大物を狙はぬ方が可いのである。

大阪女義　〔八月二十二日〕

さわり集

＝御殿、揚屋、本下

豊竹昇之助
絃　豊澤力松
琴　野澤吉藏

失禮させていたゞきませう。唯ださがは大阪、三味線と琴の調子の狂はぬ事東京のお淺などで、よくヒドイ亂調子を聽かされるのを思ひ出した。

淨曲三絃閑話（二）

是澤九似廬

この稿を、三絃閑話のつゞきとして、本誌へ載することは、その表題の手前、不似合の處もあり聊か躊躇もしたが、根底の乏しい、つれ〴〵のはしりがき、氣易い思ひで、矢張、閑話の中へ綴ることにした。

『紋下』竹本津太夫に望む

竹本越路太夫在世の頃は、攝津翁の弟子であつた先代南部太夫と、法善寺の弟子である今の津太夫とは、いつも〳〵地位の競爭者であつたが、未來の紋下として六分がた見込のある南部は病歿し、四分しか望みのなかつた津太夫は遂に紋下に納まつた。積年好敵手であつた庵下土佐太夫は隱退し、現今では獨舞臺の姿で、その人氣と、實力は誰よりも一頭地を拔いて居る。津太夫はかうした天才家の共通性とでも云ふべき、大賢、大愚の部類に屬した人で、一度高座に上れば、大愚は忽ちに、大賢に化して、藝のことでは寔に妙諦を得た人である。復雜多端な文樂座の統括者として、現在、將來に對する機構などゝなると、話がまるで板について居ない斗りか、聊か頓珍漢で、統帥者の紋下としては露骨に云へば甚だもの足らぬ存在なのである。浮世離れした、古典藝術家のこと故、之で良いのであり、その瓢々乎たる無造作ぶりが、氏の全部であり、氏の藝術とも視らるゝと謂へば夫れまでだが、文樂座の紋下と云へば、日本一最高位の淨瑠璃語りの名稱であると、誰もが思ふて居る。昔から紋下になつて居る座元、太夫、人形遣ひ、三味線彈の人々を調べて見ると、唯淨瑠璃を日本一に語つたから、紋下になられたかと思ふと、あながちさうばかりではないのである。例へて見れば、陸海軍元帥大將が、戰爭に强いといふ、單にそのことのみでは、元帥の地位にはなられぬのと同然で、卽ち將に將たる器局と、貫祿と、德望が具備すべきもので、こゝに始めて、文樂座の紋

下としての資格が出來るのである。

昔源頼朝が、別當職の和田義盛に、將に將たる器は如何なる人かと訊ねたら、一に智德あり、二に信心あり、三に仁義あり、四に深勇あり、五に人を責むること嚴しからず、このこと一つ缺げても將として用ふべからずと答へたると古書に見ゆ。

三世竹本津太夫（法善寺）は、初めは竹本山城掾（山四郎）の門人であつたが、明治二年から松島文樂座に出勤して、藝力、德風ともに一世に冠たる稀代の巨匠で、自からは庵下に甘んじて、晩年紋下、攝津翁を佐けて、文樂座殷賑を再興せしめた功勞者で、積年の間、竭望して居た七世綱太夫を襲名し、自分の名跡は當時の文太夫、今の津太夫に讓つたのは明治四十三年で、氏の死亡はたしか大正元年七月であつたと記憶する。

越路太夫歿後いろ〳〵の經緯があつて、遂に津太夫が紋下と決定した時は、さもあるべき順序でありながら、過去の紋下の實力に比較して、餘りとは懸隔があり過ぎて、恰も相撲界の横綱、梅ケ谷、常陸山無きあとの寂莫さを覺えたことは單り我等のみでなく、全國同好者の伴らぬ心事であり、告白であると思ふのである。藝、德、兼備の三世津太夫でさへも、得られぬ紋下の地位を贏ち得た今の津太夫は幸運もさることながら、この資格に對しての責任の極めて重大なことを忘れてはならぬと思ふ。

紋下で思ひ出さるゝは攝津翁のことである。七十七歳の隱退の以前に、紋下辭退を要望したことがあつたが、翁の健康と、藝力は年齡のために毫も倦怠を覺えるといふではなく、天性の謙讓家のことゝて、ひたすら、後進に道を讓りたいと思ふ念慮に燃えて居たが、文樂の紋下に据える德風と、藝格の備はつた太夫が一人もなく、仕打方は勿論のこと、當時の天下の輿論が何としても翁の、高踏勇退を許さぬ事情にあつたゝめに、翁の希望のまゝに出でしめなかつた。當時の越路太夫も相當の藝力もあり、人氣もあつて、外から視れば立派な紋下の資格が備はつて居ると思はれたが、攝津翁の默々たる德風と、あの光彩のある藝力に比べたら、極めて陰の淡い存在で、問題にならなかつたものである。それゆへにこそ、部内は勿論、文樂後援の有力筋、一般の同好者側は、倒底越路を紋下として肯定する氣にはなれなかつたのであつた。攝津翁の隱退後に越路太夫が紋下となつて、其藝を心配するの餘り翁はひそかに、妻女たか子を連れて、文樂に越路の語風を聽きにいつたのであつた。越路の淨瑠璃が、粗野である上に餘りにも聽衆を呑み過ぎて、アテ氣があつたので、弟子想ひの翁は之を氣にやむで、早速越路を呼びつけて、あれが紋下の語る淨瑠璃かと、訓誡したと云ふ事實が傳へられて居る。

攝津翁と先代大隅太夫の師匠であつた五世春太夫は、長軀白象の如き肥大な威容の備つた人であつた。體重が三十貫餘

で、實に堂々たる語風の上に、聲量の豊かさは三段目語りの貫祿を備へた巨匠であつたと云はれて居る。その當時は藝力の卓絶した太夫が幾人も居た譯で、四代目長門太夫（明治十年實太夫で櫓下）、初代豊竹港太夫（明治二年文樂櫓下）、豊竹古靱太夫（初代靱太夫の門人で明治十一年大工の頭梁に刺されて死す）、初代竹本長尾太夫（明治十二年稲荷北門芝居の櫓下）、八世竹本染太夫（五世の實子で田穂と云ひ明治三年梶太夫襲名）、竹本山城掾（三四郎）まだ其他にも巨匠俊髦そろひで、藝に火花が散り、互に鎬ぎを削つて居つたが、自然に具備して居つた藝力もさることながら、第一その德風が物を云ふて、櫓下に据えられたのであつたと云ひ傳へられて居る。その春太夫の門人、攝津大掾も師匠に讓らぬ上品な藝格と、生來の美音と、信仰心から出た藝の誠實で、謙讓な德風は、自ら求めずして紋下の榮位を把握したのであつた。其弟子越路太夫の藝力は、過去幾代の紋下に比較したら遺憾なところもあり、その人の德風が自然と藝の上に現はれることに思ひ到つた攝津翁の訓誡は、最もなことで、昔の太夫が力量もあり、人氣がいくら良くとも、容易なことではなれなかつた紋下の名稱を、贏ち得た今の津太夫は、寔に良い月日の下に生れた僥倖兒と云はるゝのも、蓋し當然なことかも知れぬ。

津太夫は相三味線鶴澤綱造に別れて、今回鶴澤重造に彈かして上京したが、我等は古き昔のことは知らず、凡そ紋下津太夫ほど、之までに相三味線が換つた例しは、まだ嘗て耳にせぬのである。現在生存中の文樂座付の三絃古參連中で、誰一人として津太夫の淨瑠璃を彈かぬものはあるまじく、そして誰もが永續が出來ず、恰も塵芥のやうに放擲せられて、昔の武士の切捨御免、津太夫の語捨御免の風があるのは、或る意味での氣隨氣儘であり、斯界の風習では奇態千萬のことである。津太夫にとつても、三味線側から考へても、相互に氣の毒であるばかりでなく、世間に對して文樂に人なき如くで斯道のためには愧かしき限りであるまいか。今度離れた綱造にしても、友次郎、道八、新左衞門、廣助、叶、本役にしろ代役にしても、氏から詰責を喰ふか、さなくば何かの事情によつて、お互に面白からぬ想ひを抱いて離れたことは、恐らく誰れ知らぬものもなき事實である。こゝに至つた經緯は、我等門外漢の窺知せぬことで、又知るべき必要もないが、外觀上まことに遺憾なことで、精神涵養を主義本領として來て居る文樂人形淨瑠璃道のため、且つは紋下としての資格から見て、餘りにも節操もなく、德義もなく、自分の藝術良心からしても、非常識の誹りは免かれぬことで、藝道の師表たるべき紋下として、にが〳〵しき振舞と思はるゝのである。

越路太夫歿後その相三味線であつた先代吉兵衞が、津太夫を彈くのを聽いたときの追想を辿つて見ると、吉兵衞の三味線はどこまでも津太夫の藝にかくれて、あの難聲を佐けて自己を空ふして語らすことに專念したゝめか、津太夫の難聲が更らに氣にならず、耳につかず面白く聽かれたことは不

思議なほどであつた。之を思へば越路の卓絶した藝力に對しても、餘裕を見せて樂々と彈きこなした吉兵衞の俤をそゞろに更生せしめらるゝほどで、實に稀代の名匠であつた。その實力とあの貫祿で、今の津太夫を彈いたから、津太夫の藝がひき立つたのは、何の不思議もない筈なのである。現今の三絃の藝風は、自分を犧牲にして、太夫を助ける三絃彈さへも乏しいのみか、藝の未熟さを隱して、兎角に聽かしたいと思ふために、藝が叡知的になり過ぎて、こせ〳〵して古典氣分がなく、神經質になつて小さく鋭どすぎるのは、時代想とでも云ふものか、惡く云へば流行の文樂太棹病であるとも云へるのである。

昔の純文樂風のこせつかぬ、のんびりした藝風に馴染だ津太夫としては、一般の今の三絃がどこにか物足らぬ處があるために、最初の内は我慢して居つても、單純な氏の氣質としてつゑ愚痴が齒莖を漏れ、重なる度びに感情化して詰責となり、之が嵩じて議論化して、遂に破綻を生じて分れてしまうのではあるまいか。かく考へて見ると聊か津太夫にも同情するところもあるが、さてそんなら、誰の三味線なら氣に入るかと岡眼八目で考へて觀ると、恐らく津太夫は誰も氣に入らぬと答へるであらう。そして甲の人は、達者な藝で音も冴えて色氣もあるが、藝が窮屈過ぎて骨がをれる。又乙の人は强腕でどこまでも敲きはきくが、そのかはりに三味線に味がなくて、模樣が彈けぬ、老人の我等はとても苦しくて面白く語れぬ。又丙の人は音色も良く、柔かさもあるが、藝が餘りにも皮肉過ぎる上に、肝腎の底力が缺げて、大時代物などは、てんで語つて居られぬ。又丁の人は、音色も良く藝に茫洋としたところもあるが、元來あの音は腹の藝でなく、腰から上の腕の藝で腹が持てぬから語れぬ。あの人はこう、この人はこうと、一々吟味し、穿鑿したら、結局今の三絃では誰にも滿足出來ぬことになる譯だ。之を又反對に三味線彈の側から謂はしめたら、昔の津太夫は力量ある眞面目な藝風で、至極彈き易い人であつたが、どうしたことか近年は聲を張る肝腎のところで、今一つ聲の押詰めが足らず、淨瑠璃の腰が碎けて間足ががつちりとせぬために彈いて居れず、持つて居られぬと答へるであらう。

凡て藝は技能ばかりでなく、太夫、三絃各自に其人の個性があり、特長もあり、缺處もある譯なので、その特長を發揮さすことに勘み合ひ、缺點は互に隱し合ひすることによつてこゝに相三味線としての必要が出來てくるので、精神の結合した處に、綜合的立派な藝術が生れて來るので、昔から三味線を女房役と謂ふたのは、誠に至當の言葉で、太夫と三絃が互に心に發する想ひやりと、自然の了解と、親しみが湧き、惚れた慾眼で菊面顏も醫」この互讓精神があればこそ、藝の融和が出來て自分も娛め、聽衆も慰籍することが出來るのである。

攝津翁が五世廣助に死なれて、相三味線に困つたとき、仕

打方は勿論のこと、門人、客筋一統が非常に心配したが、翁は曰く、廣助なきあとは、最早誰れでも宜いと答へて、當時の廣作を見立て之に彈かして、六世廣助を襲名さして、自から之を庇ひ立て、諦めて滿足して居つたのは美談であり、流石に稀世の名人の心がけは見上げたもので、この心でこそ、紋下としての資格が備はり、その美德があつてこそ部內の統率がついたのである。

大隅と團平、攝津翁と五世廣助、越路と先代の吉兵衞、土佐と今の吉兵衞、過去の紋下、庵下などに比較して、三絃古參連中から權威ある紋下津太夫が、あの立派な藝を持ちながら、鼻つまみに合ひ、四面楚歌の誹りを甘受せねばならぬのは、津太夫の不德の招きし結果と云はれても致し方のない譯で、津太夫は他人の藝を責めるに先立つて、まづ自らを顧みて、一切の勝手氣儘の考へ違ひから脫離すべきであるまいか。聽く處によれば、某三絃彈の如きは、恰も義絕同然で昔の誼みの復活は、恐らく不可能であらうとさへ、取沙汰せらるゝことは、紋下としては最も愧ずべきことである。文樂座は大なる一家族であり、紋下は家の大黑柱であり、所帶上の家長なのである。家の眞棒である家長は、同家族を纏めて、磐石の安きに置くべき義務と責任のあることは、丁度陸海軍に於ける元帥大將なので、兵の素質は卽ち將の素質なのである。紋下の藝の消長は、文樂座全員の盛衰を物語り、紋下の權威の有無は、文樂の凋落と、新展に關係することの極めて大なることに心懸けねばならぬ。近年次第に藝の逆潮を辿りつゝある文樂人形淨瑠璃の再建設は、多數の技巧家を得るよりも、唯一人の實質剛健な眞の藝術家の出現することを期待して喝まぬのである。藝道はすべて偉人と、天才によつて始めて意義ある藝術が生れて來るのである。之が文樂の復興であり、建なほしであり、振興策なのである。紋下はいつとてもこの心を持つて、全員の師表となるべき隱德を積むと同時に、義太夫精神の權化となり、斯道の新展のために好模範を示してほしいのである。我等は津太夫の過去を攻むる意はなく、固より世間一般に發表せられた以外のことは知らぬので、又之を知ることも求めぬが、唯、紋下に藝德兼備の自覺を望むと共に、相三味線に對しては「諦らめの滿足」を希望し、併て斯道の第一人者として、玄人一般の藝道精神作興を示唆し、やがて第二の名人、巨匠を生むべき斯道の溫床となるべき義務ある紋下となつてほしいのである。終りに文樂座紋下及び全員諸君の藝道總和親を祈つて擱筆する。

繪絹・色紙・短冊・扇子
下谷區仲御徒町一ノ一七
波間商店
電話下谷三七〇五番

津太夫の『大文字屋』に就て

内田富太郎

齋藤拳三氏の待望久しかりし津の大文字屋は近來の聽き物であつた。都の安藤鶴夫氏は遺憾乍ら津には不向のやうに批評されてゐたが、私はそれと反對の印象を受けた。

成る程安藤氏の說の通り、土佐の「大文字屋」は名品だつた。土佐一流の洗練されつくした艶と技巧とで、世話物の詩を漂はす優れた藝術品だつたが、津のも非常に傑作で、じつくりと哀魂を扶るような偉大な眞實性が籠つてゐる。殊にお松のクドキなぞ、あの難聲で切々と貞女の哀情を描き出す。

眼目の助右衞門の述懷にしても、義に强く情にやさしい質實な老人の親情が、測々として迫つて來る。役者で云へば土佐のは故仁左のやうに天才的で、深鋭精緻な演出だが、津のは又故松助を偲ばせる眞實に徹した、自然さがしつとりと流露して、淨曲の眞諦に觸れる傑作である。

土佐の助右衞門は粹も甘いも嚙み分けて圓悟した、一見宗岸のやうな細い深い洗練された老人として演出するが、津のは如何にも養子になつた人物らしい篤實な人間性が渾然とにじみ出てゐる。

母妙三にしても、土佐のは例の美聲で嫋々と肉緣の親心をリズミカルに表現して遺憾ないが、津のは腹で泣くやうな味ひの深い陰影がじつくりと浮び出てその迫眞性におのづと打たれるものがある。

肉親妙三と義理親助右衞門の哀悶と切實にクッキリと語り分ける點では私は土佐より津に軍配を擧げたく思ふ。

只後半、悲劇から喜劇へ轉換する變り目からは、ケレンでないケレンを持つ纖細で輕い土佐が津をリードする。

恐らくその人物の肉へ骨へと喰ひ込んで行く重厚でひた向きな津の藝風がリアルに突放し得ない語り口に原因するのだと思ふ。

結局、この大文字屋の一段は前半は津に、後半は土佐にそれ〴〵汲めども盡きぬ妙味があつた。

猶最後に書き留めたいことは、菅專助作の「紙子仕立兩面鑑」のこの大文字屋の段は、堀川に傳兵衞の出の如く、或は湊町に清十郎、酒屋に半七の如く、世話淨瑠璃の中心となる一段中には必ず二枚目が登場するのが、可本物の通例定石となつてゐるのにこの一段には皮肉にも二枚目の助六は出て來ない。

色餓鬼のやうに情心を燃やす助六の姿を見せない所に、かへつてお松のいぢらしい哀切な夫助六への思慕と、肉親の可愛さに老の身を涙に泣きぬらす助右衞門のエゲられるやうな哀感が、切々と湧き出づるのではあるまいか。

靈泉寺偶感

山田壽瓢

靈泉一浴世情疎　況有層樓稱客居
占盡人間閑富貴　觀山觀水又觀書

同次韻

石井規外

湧泉洗暑夏光疎　自適悠々恣占居
顧客遽然朝夕減　偏依苦舌五行書

秋五句

三久女

稻妻や山門までは小半丁
夕月にヤンマ取る子の戻りけり
碁會所に羽織の人や十三夜
こほろぎや椽の下かと思へども
秋暑し屋根に生えたる草の丈

會報

投稿歡迎

森三好

殘暑尙退かず、納涼味感深き八月廿日小石川區江戸川町十一喜三香さん方に於て、二三好會の懇親會に招かれ、此日日曜日にて各員の集ひ早やく、午後四時より晩餐を共にし、左の通り演じ和氣靄々裡に散會せり。

十種香（二葉、二三壽）鳴門（美佐保、三好）日吉（三省、二三壽）酒屋（喜三香、三好）野崎（三好、二三壽、ツレ喜美香）柳（一勝、二三壽、ツレ三好）

二三好會

二三好會は八月廿五日午後六時より本所駒形倶樂部に於て開催せり。

十種香（二葉、二三壽）酒屋（喜三香、三好）日吉（三省、二三壽）朝顔（三好彈語）太十（村雨、喜三子）柳（一勝、二三壽、ツレ三好）先代（美佐保、二三壽）

一葉會

阿部一

第三回一葉會は去る八月三日文化倶樂部で開催致しました。

此倶樂部はいつも聽衆の多數來場に努力してゐますので、始終八九分の來聽者があります。他の倶樂部もそれ〴〵相當の努力はしてゐる樣ではありますが、此倶樂部の樣な具合には行きません。古典藝術たる斯界の爲めにより以上の出演者も席亭も一心同體となつて聽者の少しも多く來場する事に努めたいものと思ひます。

なほ、彙報欄に報道しました通り、巴雪會は八月八日喜久本會館で開催致しました。

鈴ヶ森（喜光、八重子）小磯（和子、巴雪）朝顔（葵光、八重子）太十（一、巴雪）松王（童雀、八重子）

靈泉寺溫泉より

山田壽瓢

前略……本月十七日長野縣に遊び、上田連中と大屋まる屋に會し、一夕盛況裡に語り合ひ、靈泉寺浴場に滯留歸京仕候（八月廿五日）

壺坂（松下喜勝）紙治（寺田巴良）赤垣（田村錦）新口（島田綾登）阿漕（山田壽瓢）絃（竹本綾秀、鶴澤蟻之助）

長谷川文久氏より

鹽原へ去る七日より來てゐます。大變な景氣ですが、しかし事變の爲め浴客が例年とは一寸異なり、それに義太夫の催ほしなどは一向にありません。四五年前迄は津賀太夫、米太夫それに私や大森の美登利、千鶴の諸氏が盛んに語り中々樂しかつたものですが、本年は淋しい感じが致します。（八月十二日）

南條壽光氏より

小生本月上旬より當地に療養中に候溫泉宿は吾妻富士の中腹にあり、海拔三千尺、涼味百パーセント、既に秋といふに時々鶯を聞く。

秋立てまだ鶯の高音かな

麓の村に七十八翁竹本忠太夫（チョボ語り）あり、一夕招で聞き又語る。（福島高湯溫泉にて八月十三日）

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

浄曲界秋の第一聲
批評する會・される會

浄曲無名會を始め或は七十歳以上の人々の集ひとして壽會などを組織し、常にこの好きな浄曲を如何にして繁忙な日常生活の中に織り込んで、短時間に思ふ存分徹底的に心行く迄樂しめるかといふ方法に就て、様々な考慮と工風を試みつゝある河野國聲氏は、今回『批判する會・される會』を企て、麻布公會堂に於て九月十日左記賛成出演者を以て開催する事になつたが、茲に氏の趣旨の一端を記載して讀者諸賢に紹介する。

河野國聲氏の趣旨

趣味として娯樂として、更に眞善美の極致、藝禪一味の浄曲道として……そして同時に斯道の振興發展にも寄與貢献しつゝ、この完成された獨特の國粋藝術を味わつて行き度いのです。

しかもこの浄曲は獨り樂しむ内觀的無限の妙味と、友と樂しむ陶醉的無上の面白味が有つて、浄曲の友は互に顔を見て居る丈けでも、愉快で堪らぬものなのです。從つて斯道は一口に言ふ天狗氣違ひにも成り易く、其心構へとやり方の如何では報國的藝術とも亡國的遊藝ともなるのです。

吾人等聊でも思慮ある斯道の友は、舊來の陋習弊風の中に、正しい新らしい無上道を發見しつゝ、共に心行く迄好きな浄曲道を樂しんで參りたいではありませんか。實は未だこうした精神的の希望丈けで、實行上の具體案や組織等は完成して居りませんが、賛成者が澤山に成る頃は大勢の總意でキツト立派なものに成りませう。先づ第一に辱知の貴下の御共鳴を願ふ次第です。

そこで理想理屈を並べる前に、意義も有り面白味も多かりそうな試みを手つ取り早く一つゞつ實現して見やうと思つて爰に先づ「批判する會・される會」といふのをやつて見度いと思つて提案致します。どういふ心理か自分の義太夫を人に

聞かすのは誰もお好き、又理屈なしに嬉しいものですが、聽き手が笑つて居る事もある。頭の上を聲が素通りして居る事も有る。お菓子で人を釣つて語る寢床淨瑠璃で滿足する人達には何をか言わんやであるが、己を知り眞の淨曲を知るの我黨の士は、寧ろマジメな聽き手の多きより、心から聽く眞の淨曲趣味者の心を友として語るべきである。又日頃の努力や練磨の反響を批評して貰つてスグ又明日の研究の資料としたら、どれ程參考にもなり上達も早い事であらう。反省する者は天狗にならぬ。現代の斯道は反省の方法手段を缺いて居る。たまに批評すれば蔭口惡る口の惡評ばかりである。人にも切り捨御免をやられるから、己も亦手當り放題他人の惡評をやる。これではまるで百鬼夜行、天狗の鼻のヘシ合ひ押し合ひ、野狐の邪道である。

そこで今回の試みに玄素を問はず、當日萬年筆一本御持參、會から差上げる用紙へ演者の批評を書く、勿論評者の住所氏名を書いて堂々と親切に批評するのです。人の義太夫を批評的に聽くと、先づ自分の力が向上する。記名で責任的に批評を書く事は面白いが又仲々骨の折れるものです。それ丈け常一般の切り捨御免式の批判が無責任のものである事にも氣がつき、本會の會員は自他共に共淨曲趣味を淨化し紳士的な高尚なものにして行くでせう。（以下略）

番組

解說付の義太夫（第一部）

（午後一時より三時迄）義太夫に解說の必要（安都都昇）千本櫻の解說（川口子太郎）主として鮨屋の研究（西村游史）實演（鮨屋……國聲、猿三郎）

批評する會・される會（第二部）

帶屋（かなめ、仙照）本下前（正鳳、道之助）同奥（大嘉津、猿藏）新口（錦松、岡三）孀衣お百度（子太郎、和孝）六角堂（金扇、染登）先代（素鳳、辰六）壺坂（三玉、龜造）草履打（喜鳳、道之助）妙心寺（蝶花形、良造）太十（三司猿三郎）千本櫻（松玉、彌國太夫）五斗（松蝶、米翁）野崎（五口、道之助）陣屋（美昇、鏡太夫）橋本（操、道之助）沓掛（桔梗、辰六）

東都聲義會の復活

競演會としては東都五十義會と併立して多數の會員を有し、會長高野昇氏の後は秋本雲雀氏が繼いで、竹内たもつ氏を始め其他幹事諸氏の協力で一時は非常な隆盛を極めた東都聲義會は、久しく休演中秋本雲雀氏は永眠され、次いで竹内たもつ氏も長逝といふ一きわ淋しみを增したのであるが、今春舊友同士相圖り懷舊の情を溫めんと淀橋倶樂部に一夕の催ほしを開いた事より動機となつて、同會の

復活となり、六月二日大塚「ひばり」に於て發起人として山田壽瓢、本城冠之、井上和風、神馬里芳、黒川叶、秋本ひばりの諸氏が協議會を開き、大會を年二回と定め其他毎月例會を開催する事に決定したが、お祭騒ぎでなく、非常時銃後の慰安の趣意に基き極めて質素に、先づ神樂坂の相互倶樂部を本城として、來る九月十六日より五日間左記出演者に依て第一回の例會を開催することになつた。

（十六日）生昇、愛京、壽瓢、峯樂、八雲（十七日）圓六、光華、華笑、和勢松鶴（十八日）喜聲、綾登、和風、歌笑花柳（十九日）久良、華昇、素鳳、淡路冠之（廿日）ひばり、貴昇、叶、里芳、隅斗……以上抽籤

淨曲無名會

八月十九日午後十一時より淺草松屋ホールに開催。安藤どくろ氏は旅行の爲め休演。

河庄（平茶、廣助）寺子屋（桔梗、道之助）紙治（國聲、廣助）重の井（操、道之助）埴生村（長平、龜造）野崎（美峰、猿之助）

なほ次回は九月十三日電氣倶樂部に開催、番組は左の通り。

忠三（どくろ、司好）本下（美峰、猿之助）壺坂（國聲、猿三郎）橋本（操、道之助）岸姫（長平、龜造）

因會女子部理事長
竹本素女師辭任披露

先月明治座の女義大會開催から紛擾を釀し、女義大會はお流れ、遂に帝都日本義太夫因會女子部理事長竹本素女師の辭任となつた事は既に諸賢御承知の通り。

素女師は八月廿日午前十一時半より、京橋第一相互ビル七階東洋軒に於て、因會男女役員を始め淨曲協會の津村氏並びに本社を招待、理事長辭任の披露會を催ほし、席上挨拶を兼ねて聲明をした。

裏に「女義擁護會」とかいふものが生れたので、誠に結構なことゝ自分も出席はしてゐたが、そも〳〵此の擁護會なるものが組織さるゝ時も自分は少しも話を聞かず、今度の明治座の大會開催に就ては某新聞には私へも通知をしたといふ事が書いてあるさうだが、自分は全く知らないので、大會中止になつた事は自分の理事長辭任からのやうにも書いてあるらしいが、これは、私が松竹の大谷さんに逢つた時に「明治座に女義大會が催ほされるやうだが、一體どういふ興行の立て方をなさるのですか」と聞いた處「お前が入つてゐないやうなら、松竹として興行はしない」と大谷さんのお言葉で、これは私の辭任の爲めでなく、松竹から斷られた事をはつきり申上げてをきます。又大阪の雛昇云々といふ事も書いてあつたやうですが、今春歌舞伎で素女會開催の

際に雛昇をも組込んで、東京の皆様に雛昇を御紹介したのは私で、その紹介をした私が何んで雛昇云々といふやうな事を申しますか。と凡て某新聞記事の誤報を難じたが、支配人井上修吾氏も又素女師の言に相違なき事を證し、なほ「明治座で女義大會開催に就て、仲介者が出演者から判を取つたといふ話であるが、藝人が興行を契約する場合、先づその給金を定めた上、捺印どころか手金を取るのが常法で、反對に判を取るといふ事は未だ嘗て聞かぬ。そして出演者の判まで取つて置き乍ら有耶無耶に中止となつた様であるが無責任極まるものではなからうか。どういふ方々が出演を約されたか知らぬが隨分侮辱された話と思ふ」と付け加へられた事は出席者一同の耳目を引いた。

斯くて素女師は女子部役員の懇請をも一蹴し、決然辭任となつたのであるが、女義の大劇場進出は素女會あつての進出で、自分の會を犧牲にしてまで因會女子部の發展に努力し、漸く女義の向上が認められかゝつた今日、同師の辭任は遺憾の次第である。

なほ明治座の女義大會に就ては、松竹の某氏が大阪の某老太夫に對し、ある野望のあつた事で、紛擾からうるさくなつた老太夫は、ある方面へ一時身を避けたといふ模様もあるが、それはこゝに書く要はない。

素玄淨曲研究會の一周年

岡田蝶花形氏主宰の素玄淨曲研究會は本月一周年を迎へ、廿八日午後六時より丸ノ内電氣倶樂部に於て、第十三回を一周年記念として開催する事になつたが、これに先立ち八月廿七日午後五時より日比谷蠶糸會館七階日本間に於て、懇親會を兼ね一周年記念の宴を催ほし、參會者卅餘名、席上大正九年に斯界を引退した竹本綾香の十種香を聽き、左記諸氏の十分語りもあり、終つて各自感想の發表等座談數十分和氣靄々として九時半散會。

尚十分語りの諸氏並に第十三回番組左の通り。

十分語り

朝顔（愛氷、三平）辨慶（蝶花形、三平）野崎（古清、三平）先代、日吉（ウィリアム・ジョンデー、三平）寺子屋（十三三、三平）紙治（其甫、猿藏）酒屋（素鳳、三平）壺坂（軌外、三平）合邦（淡路、三平）岸姫（津彌太夫、猿藏）十種香（綾香、三平）

第十三回記念會

安達（竹史、東太夫）岡崎（北斗、猿之助）河庄（越道、巴住）毛谷村（駒登太夫、扇之助）

なほ同會の二年度の豫定出演者左の通り。

竹史、北斗、越道、駒登太夫（十三回）福登久、蘇鳳、其甫、團蝶（十四回）若狸素鳳、千晴、巖太夫（十五回）蝶花形、遊史、貴昇、佳照（十六回）有樂、大夫い、子太郎、廣助（十七回）三平、紫蝶愛氷、司、米翁（十八回）淡路、十三三壽瓢、染登（十九回）松雨、三司、かな

め、兵吉（廿回）軌外、乃菊、無涯、正臣、若好（廿一回）さかえ、健藏、東朝（廿二回）越巴、華仙、昭六、彌國太夫（廿三回）全員十分語り、組春（廿四回）

名作淨瑠璃同好會

通し物上演に益々好評を博してゐる名作淨瑠璃同好會は、十月二日午後五時より電氣倶樂部に於て左の番組に依り第四回を開催する事に決定した。

（前）本朝廿四孝……（一）諏訪の森の段……濡衣お百度（横藏、子太郎。濡衣忠二）力石（淀橋）（二）桔梗ヶ原の段……まぐさ刈（忠二）乳爭ひ（八雲）（三）勘助住家の段……景勝下駄（王華）唐織使者（宮古）竹藪（淀橋）奥座敷物語（子太郎）以上八段絃（和孝）（四）長尾館の段……十種香（金泉、團龍）狐火（愛氷芳太郎、ツレ松四郎）

（後）新口村（都昇、都太夫）小磯（和子、巴雪）忠六（梅聲、巴雪）太十（一、巴雪）先代（喜光、八重子）大切（掛合）寺子屋（松王、一。源藏、梅聲。千代、和子。戸浪、葉光）絃（巴雪）

巴雪會

八月八日喜久本會館に開催。八陣（巴津子）野崎（葉光、八重子）

松葉會

八月十二日（交正倶樂部）同十四日（入谷倶樂部）に開催。

（十二日）新口（素鳳）十種香（金扇）城木屋（かなめ）河庄（越巴）紙治（國聲）絃（廣助）

（十四日）酒屋（軌外）長局（越巴）辨慶（春日）河庄（平茶）絃（廣助）

氏家鶴峰氏歡迎淨瑠璃會

朝鮮文藝社は七月廿五日午後七時より京城本三倶樂部に於て、京城素義聯合會郁文堂新聞舗の後援のもとに、大阪氏家鶴峰氏歡迎淨瑠璃會を開催。

辨慶（あづま）鮨屋（貴勢）寺子屋（北圓）酒屋（錦）太十（水音）橋本（鶴峰）絃（猿糸、東廣、梅若）

かに・天ぷら
御料理
深川區白河町一ノ六
（區役所通り）
二葉
錦　さと

帝都素義聯合會　十月七、八日並木倶樂部に開催。

東都五十義會　同十八、十九、廿日日本橋倶樂部に開催。

兜會　同廿一日電氣倶樂部に開催。

本誌後援名譽會員（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏　吉川浪補氏　阿部一氏　北島北斗氏　中澤巴氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　小川都山氏　安藤都昇氏　保々長平氏　栗原千鶴氏　岸竹史氏

神馬里芳氏　岡本柳光氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　林和勢氏　本多可笑氏　飛石かなめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　大用大嘉津氏　田口辰壽氏

疋田大龍氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橋氏　坂倉素遊氏　川口子太郎氏　小埜長とろ氏　宮本武藏氏　萩原うつぼ氏　乃村乃菊氏　中野吳羽氏　山下彌生氏　國井やまと氏

菅原葉光氏　松林福笑氏　長谷川文久氏　鈴木兒雀氏　安藤光樂氏　水戸部壽氏　原田越巴氏　河野國聲氏　松岡語松氏　田中湖月氏　湯淺光玉氏　岡崎円六氏　寶藏寺天昇氏　大築葵氏　松本朝章氏

及川　旭氏
柳　有明氏
中川　愛氏
寺岡　三幸氏
木村さかえ氏
齋藤　山生氏
平井　榮氏
細川　清氏
金田　金鳳氏
錦　松氏
淺田　奇聲氏
星野　桔梗氏
歸山歸世花氏
猪谷　銀水氏
岩木　義雀氏

吉良　蟻若氏
岩田　末成氏
高瀨　操氏
吉田美地句氏
横井　三由氏
野口みなと氏
北村　三葵氏
池田　三國氏
吉田　三芳氏
高橋　宮古氏
鈴木　松實氏
小原　松樂氏
菊池　秋月氏
平井　壽樂氏
山田　壽瓢氏

田口　司重氏
濱口　秋華氏
武笠　宏亮氏
高品　一重氏
平山　平茶氏
桑原　美峰氏
佐野　美昇氏
松岡茂里雄氏
白井　清華氏
近江　清華氏
湯原　清司氏
沼井　盛鶴氏
時田　靜史氏

（地方之部）

米國平野　一昇氏

同　武榮　玉氏
同　杉山　陶岳氏
同　兼廣　廣玉氏
同　西本　西紫氏
神戸　岡田　源氏
大垣　吉岡十八公氏
船橋　川奈部銀司氏
下關　保良　鈴鳳氏
横濱　和田　和朝氏
同　霜島　錦司氏
八幡　古賀　大彌氏

當座帳

▽中老會事務所　中老會事務所は和田春和氏病氣の爲め、一時假事務所として下谷區金杉上町一八番地保谷紅司氏方に移す。

▽武笠　宏亮氏　豊島區椎名町四丁目二一二四番地へ轉居。

▽西田　可松氏　向島より吾嬬町東七丁目五番地の工場附近へ移轉されたので、以後凡ての通信は工場宛ての事。

▽長谷川文久氏　八月七日鹽原溫泉へ。

▽加藤　兜氏　名古屋市中區南桑名町三丁目三番地へ轉居。

▽南條　壽光氏　福島縣高湯溫泉へ。

▽五聲會　九月十七日電氣倶樂部に開催。

▽野澤道之助連　道之助連の細川淸、高瀨操、藤本喜鳳の諸氏に星野桔梗氏が加り、八月廿四日飛行機にて大阪へ、大阪にて桐竹門造師指導の乙女文樂入りにて義太夫會を催す。

▽北島　北斗氏　同氏の母堂は鄕里富山にて八月十七日永眠、享年七十五。

▼文樂座　九月は名古屋神戸を巡業。

▼鶴澤紋敎　同師の母堂は七月十五日逝去。

▼竹本小津賀　同師の母堂は七月廿五日逝去。

寄贈新刊

▼寶塚月報▼淨瑠璃時報▼藝▼京城のラヂオ▼大日本淨瑠璃雜誌▼みどり▼淨曲新報▼オール演藝▼淨曲研究▼明るい家▼斯水▼文樂▼土▼露▼風▼趣味之友▼佐渡牛（中山德太郎氏著）▼淨瑠璃月報▼淨瑠璃雜誌

第百七號　（毎月一回十日發行）

▼記念寫眞揭載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

昭和十四年九月八日　印刷納本
昭和十四年九月十日　發行
東京市小石川區音羽二丁目二四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所　電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目二四
發行所　太棹社　振替東京三二七八五番

廣告料

	普通	特別
一頁	金貳拾圓	金參拾圓

定價

一部	金三十錢	郵稅三錢
六月分	金一圓八十錢	郵稅共
一年分	金三圓	郵稅共

近刊　帝都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日『帝都素義名鑑』の刊行を企てました。初め『東都素義名流大鑑』といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回『帝都素義名鑑』と改める事に致しました。しかし、もつと良い名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

五月頃には刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勸誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫眞本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて裝幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太棹社

昭和十四年九月八日印刷納本
昭和十四年九月十日發行
（毎月一回十日發行）
太棹（第百七號）
定價 金參拾錢

トーパア級高

莊　　綠

○五二ノ二町淵岩區子王
赤羽驛東口下車・郵便局裏

御申込は直接弊莊又は電話下谷六一八一番
（田坂）を利用下さいませ